

視点取得や評価懸念が羞恥感情や共感性羞恥に与える影響

1421202 中尾颯之

Key words: 視点取得, 羞恥感情, 共感性羞恥

目的

羞恥感情と共感性羞恥は、それぞれ存在する他者との心理的距離に関連してその程度が規定される。共感性羞恥の場合、その行為者との心理的距離が近い時に最も羞恥を感じ、心理的距離が遠くなるにつれて羞恥感情は減少していく(桑村, 2009)。一方で、自らの羞恥感情の場合、観察者との心理的距離と羞恥感情には逆U字的関係が成立する。また、これらの羞恥感情は、対人不安傾向の高さと関連があることが明らかになっている(佐々木他, 2005)。しかし、先行研究では調査対象者を女性に限定しており、男性も含めて同一の結果が得られるか検討する必要がある。そこで、本研究では先行研究と同様の結果を再現し、視点取得や評価懸念が羞恥感情に与える影響について検討することを目的とした。

方法

手続き 大分大学の学生 109 名(男性 55 名, 女性 54 名) 平均年齢 20.31 歳 ($SD=0.95$) を対象に、質問紙法を用いて講義中に配布し、回答を求めた。

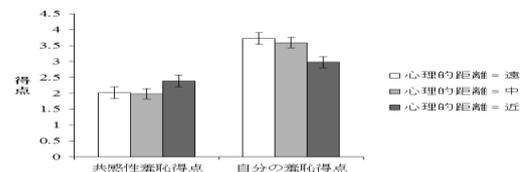
質問紙の構成 調査参加者は性別、年齢などの個人属性、多次元共感性尺度(鈴木・木野, 2008)、評価懸念尺度(山本・田上, 2001)、シナリオ場面における羞恥感情について回答した。シナリオは、心理的距離がそれぞれ(近、中、遠)の3種類を被験者間、自らの羞恥場面と共感性羞恥場面の順序(共自条件)を被験者内で操作した6種類を作成した。

結果

尺度の分析 多次元共感性尺度について最尤法プロマックス回転による探索的因子分析を行った結果、先行研究と同様に、被影響性($\alpha=.85$)、視点取得($\alpha=.76$)、他者指向的反応($\alpha=.77$)、創造性($\alpha=.69$)、自己指向的反応($\alpha=.74$)の5因子が抽出された。また、評価懸念尺度($\alpha=.92$)は先行研究と同様に1因子構造を採用した。

心理的距離と羞恥感情 共被験者内間混合要因の分散分析を行ったところ、共自と心理的距離の交互

作用が認められた($F(2, 106)=7.41, \eta^2=.12, p<0.1$)。下位検定を行った結果、共感性羞恥においては、心理的距離と羞恥感情の間に有意な差は認められなかった($F(2, 212)=1.59, \eta^2=.03, n.s.$)。一方、自らの羞恥場面においては、心理的距離と羞恥感情の間に有意な差が認められた($F(2, 212)=4.83, \eta^2=.08, p<.01$)。先行研究において認められた自らの羞恥感情における心理的距離との逆U字的関係は成立しなかった(Figure 1)。



個人の特性と羞恥感情 共感性羞恥や羞恥感情に及ぼす視点取得、評価懸念の影響を検討するため、step 1 で心理的距離、個人属性、多次元共感性、評価懸念、step 2 で心理的距離と多次元共感性、評価懸念の交互作用項を投入した階層的重回帰分析を行った。その結果、共感性羞恥に及ぼす視点取得の影響に有意な説明率は認められなかった($R^2=.22, n.s.$)。一方羞恥感情は評価懸念に対して有意な標準偏回帰係数が認められた($R^2=.29, \beta=.34, p<.01$)。

考察

本研究では男性も含めた調査参加者を対象に、羞恥感情と共感性羞恥と心理的距離の関係について検討したところ先行研究と同様の結果を再現することはできなかった。その理由として、心理的距離の変更や、シナリオの問題が挙げられる。自らの羞恥場面において、逆U字的関係が成立しなかったのは、羞恥感情だけでなく、別の感情が惹起されてしまったためだと考えられる。また、羞恥感情と評価懸念との関係は明らかとなった一方、共感性羞恥と視点取得との関連は認められなかった。今回のシナリオでは、他者が恥ずかしい行動をした時、恥ずかしがっている様子が観察されなかったためだと考えられる。

引用文献

桑村幸恵 (2009). 共感的羞恥と心理的距離. パーソナリティ研究, 17(3), 311-313.